

平成26年度教師海外研修(ガーナ) 研修報告書

学校名	岐阜県中津川市立落合中学校	氏名	平林悠基
-----	---------------	----	------

1. 現地研修に対する各自の目的とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

目的は2つあります。1つは”世界と教育を通じてつながる”ということです。2つ目はそれを”子どもたちに伝え、世界や自分たちの今を考える”ことでした。1つ目の”世界と教育を通じてつながる”ことについては、生徒たちと日々触れ合う中で、生徒自身が海外や異文化へ興味関心が高くなっていると感じています。その中で教員自身が強い関心を持ち情報収集することはもちろん、実際の現場で体験し、感じたことで生徒に伝えていくことが不可欠だと考えていました。その目的は今回の濃い14日間で達成することができたと思います。2点目についてはこれからの実践によりますが、夏期休業が終わり、生徒に一部ガーナでの体験を話したところ、とても関心を持って聞く姿勢、考える姿勢がありました。それをより深め、一緒に考えてもらうために、これから実践し、2つ目の目的も達成したいと考えています。

2. 訪問国から学んだこと(気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど)

(1) 柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

私はこれまで途上国や海外に経験がありましたので、アフリカの中でも安定し、成長を続けているガーナで、大きく驚くことや、否定的になることはなく、むしろ全て肯定的に受け入れることができ、ガーナの人の温かさや気遣い、子どもの夢や元気さに感銘を受けました。中でも子どもに「What is your dream?」と質問すると、多くの子どもが積極的に手をあげて発表する姿には感銘を受けました。日本ではあまりそのような光景を目にしたことはありません。当然、教育環境は整っておらず、目標や夢に向かうために必要な機会は十分ではありませんが、その中でも前向きに進む姿は自分や日本の子どもも学ぶことが多いと感じました。

(2) 柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

文化や国民性、経済状況やインフラ、生活環境が違っても教育に対する親や教師、子どもの思いは一緒なのだ実感しました。むしろ経済的に豊かでない中で、教育こそが未来を変えるものであるという気持ちが学校に訪問した際に感じました。その点は、同一の思い以上にこちらが学ばなければならないものかもしれません。逆にこれまでの情報伝達式の教育は先進国では頭打ちになっているように思います。そのため、教育面で少し先に進んでいる我々の経験や反省を活かし、さらにガーナやこれからの国に良い教育が行き届くようにできるのが柱3の「共通の課題について共に考え・共に越える」につながっていくのではないかと考えています。

(3) 柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

柱2の「日本と訪問国のつながりや同一性を理解する」に記載しましたが、教育の環境面やソフト面でリードしている日本には成功もあれば、まだまだこれから発展が必要な問題があります。情報伝達や、ボトムアッ

プの教育、規律などは成功していますが、可能性を伸ばす、1人1人にあった学習支援を、障害のある生徒への支援等、これからに向けての課題があります。それらを他の国と共有しながら、本当に今の子どもにあった教育とは何かを考え、どの国でも高いレベルの教育が受けられるように共に考え、乗り越えていくことがこれからの教育に携わる人材にとって必要ではないかと思います。

3. JICAの国際協力事業の「良い!と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

日本にはまだまだ世界に貢献できること、しなければならないことが多くあると改めて感じました。天水稲作持続的開発プロジェクトを見学しましたが、細かく質の高い技術、現地とのコミュニケーション、広がりや継続性を見据えた仕組みなど日本の強みを実感しました。経済の世界では他の先進国と比べ”日本の競争力が落ちている”と良く言われます。しかし、前述の強みや精神はまだまだ残っており、世界でそれを必要としている場面は多くあると思います。今後はそこに日本全体が目を向けて、”世界に大きく貢献する日本”になっていくことが重要だと思います。そのためもっと情報発信し日本全体を巻き込み、ムーブメントになるような活動がJICAでできればと思います。

4. 訪問先ごとの「感じたこと」や「学んだこと」

⑥ 天水稲作持続的開発プロジェクト

これまでは日本の技術支援がどこまで貢献できているかわかりませんでした。しかし、今回の天水稲作持続的開発プロジェクトは、これまでの経験を活かし、目標設定や手法の選択など実効性があり、意義のあるフレームワークが設定され、大きなインパクトをもたらされていることを目の当たりにしました。それは直接農家の声を聞き、どのくらい収穫量が増えたか、質があがったか、それにより生活がどう変わったか、心がどう変わったかを何名もの方から聞くことができたからです。また小さな地域単位だけでなく、国全体への展開も見据え、現地のコミュニケーションをとりながら、スタッフを育成し、普及の仕組みを構築されていることにとっても感心しました。一方で全てうまくいっている見える裏では、農家の理解やコミュニケーションの難しさ、自律的に広がっていくための気遣いなど難しさも現地で感じることができました。(平林悠基)

⑨ 国道8号線改修計画プロジェクト

現地で求められていることと、日本のインフラ技術がダイナミックな形で目にする事ができたプロジェクトです。現地で求められていることの中でも国民全体の生活に関わるインフラ整備はインパクトが大きいと思いますが、それに対し日本の丁寧で細部にもこだわったインフラ技術や仕事の仕方を提供し、現地に大きな変化をもたらしていることに対しても意義を感じました。細部へのこだわりは破損しづらく長く使ってもらうための工夫、走った時にスムーズさを感じる地面から感じる事ができました。しかしこれらを多くの日本人は知りません。もっと発信して、日本が世界に貢献できることをさらに考え実行できる国になることが必要だと思います。(平林悠基)

⑩ テテクワシカカオ農園

ガーナで一番最初にカカオの栽培が始まったと言われる農園です。宣教師が外国から輸入し、始めたと言明がありましたが、それが国家を支える産業になっていることに歴史や、不思議さを感じました。カカオを間近で見るとは初めてで、不思議なものを見るようでした。実際に中身をあけてもらい、実の中にさらに中心にあるチョコレートになる部分を食べさせてもらいましたが、苦いチョコレートのような味でした。日本でも良く話題にあがる児童労働や労働環境の問題については感じませんでした。(平林悠基)

⑪ カカオ残留農薬検査能力向上プロジェクト

アフリカのイメージだと大雑把に扱っているイメージがどこかあるかもしれませんが、実際に現場から見た姿は違うものでした。国の大きな産業ということで、大規模な施設で、クオリティをコントロールするチームがあり、農薬が残っていないかチェックするチームがありと品質へのこだわりや細かさがありました。農薬をチェックするのは主に手作業で行っていました。残留農薬をチェックするのは特に日本からの要望のようです。しかし、農薬を抑えることへの意識は世界全体に広がりつつあるので、対応を強化していると情報がありました。(平林悠基)

● ガーナでの食事全般

ガーナ料理は日本では食べたことがなく、日本人にはあまり馴染みのないだと思います。今回の研修では2回、家庭料理のフーフーを作り、食べることができた時はとても新鮮でした。芋を中心にこねて、おもちのようにし、それをスープにつけて食べるスタイルです。フーフーはすこし酸味があり、スープは少し辛めです。日本のメンバーはおおむね好んで食べていたように思います。(平林悠基)

5. 印象に残る写真2点 とその解説

●写真1…ファイル名 [FRK_3430]

◇キャプション：談笑する教師

◇解説文：

今回の海外研修では移動から食事、見学からワークショップまで常に行動をともにしてきました。その中で普段はなかなか話せない教育について、それぞれの思いなどを話し合うことができました。1人で考える時間も多くとても意義のある時間になりました。



●写真2…ファイル名 [KMD_0301]

◇キャプション：負の遺産 ケープコースト城

◇解説文：

今回の研修の中で教育以外で特に考えさせられたのがケープ



コースト城でした。実際に奴隷だった方が入れられていた部屋に入ると様々な思いが出て、想像を越える世界がありました。

6. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

現地の中でも特に重要になるのが現地の人とのコミュニケーションや交流だと思います。プログラムはある程度決まっていますが、その中でも話すチャンスはたくさんありました。そのために現地と打ち解けられる言葉や出し物を準備することは大切だと思います。また、ある程度授業のイメージを持って、逆算してインタビューや情報収集を行えば有効だと思います。

7. その他全般を通じての感想・意見など

冒頭にも記載しましたが、生徒たちと日々触れ合う中で、生徒自身が海外や異文化へ興味関心が高くなっていくのを感じます。その中で教員自身が強い関心を持ち情報収集することはもちろん、実際の現場で体験し、感じたことで生徒に伝えていくことが不可欠だと考えています。その思いで去年は個人的に東ティモールへ渡航しました。現地の方の生活、教育環境の悪さを生徒に伝えたところ、やはり生徒は強い関心を示し、「自分の生活は恵まれている」「自分にも何かできることはないか」と素直な反応がありました。途上国では国ごとに生活スタイル、文化、強みや課題があると思います。前回は情報を伝えて少し考えるまでにとどまりましたが、今回のガーナの経験を子どもたちに伝え、一緒に考え、行動が変わっていくような授業を展開したいと思います。

以上